

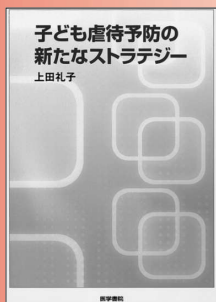
「予防」のための情報に富む一冊

【評者】上別府圭子

東京大学大学院医学系研究科
健康科学・看護学専攻家族看護学分野

子ども虐待予防の新たな ストラテジー

上田礼子(著)



定価 2940 円
(本体 2800+税 5%)
医学書院
(Tel.03-3817-5657)

子ども虐待に関しては、早期発見と子どものケアのために、行政、民間、NPO が協力し、保健、福祉、医療、教育、司法、警察などの領域の専門家および一般住民の大量の人的エネルギーが投じられてきた。なかでも市町村保健師の努力と貢献は大きい。その結果この 10 年で、法的整備や地域のシステム整備、国民の理解は格段に進んだと言ってよいだろう。ところが、児童相談所が受ける子ども虐待の相談件数は増加しつづけ、虐待による死亡件数は横ばいの状態である。次の 10 年は、多機関・多職種が一丸となって「予防」にエネルギーを投入しなければならないと考えていた矢先に、本書が刊行された。

半世紀にわたり子どもたちの発達を支援してきた著者は、子どもの特徴を plasticity(可塑性)と resilience という用語で表し、後者に「強靱性」という訳を当てる。子どもがもつ潜在力への確信が、著者の仕事の根底に流れている。また本書の特徴を一言で表すなら、“informative”(有益な情報に富んだ)という形容がぴったりであると評者は思う。たとえば「子ども虐待予防の取り組みの歴史的変遷」や、子どもの発達や親子関係をめぐる種々の理論的枠組みに関する記述、「子どもの『危機的状況』に関する出来事と法制度・施策」の一覧表などは、我々がこのテーマを俯瞰し、自分の立ち位置を確認するとともに目標を見定めることを助けてくれる。

著者はネグレクトを見過ごすことへの警告を発するとともに、帰結として虐待死などのことを考えれば「3 次予防」などと言っているのは手遅れであることも指摘し、ポピュレーション・ストラテジーとハイリスク・ストラテジーを相補的に用いた虐待予防方略を紹介する。評者自身「周産期からの虐待予防」に関する研究や啓発活動に取り組んでいるが、著者のいう「予防」はもっと幅広い。子どもにはライフステージごとに新たなニーズがあるから、妊娠期や新生児期のみならず青年期にいたるまで、予防対応が必要であると指摘する。

著者は、各職種による専門的アセスメントの前に行うスクリーニングを「プレアセスメント」と総称し、新たに考案した“PACAP”を紹介する。多機関・多職種連携を前提として作成された、簡便なスクリーニング・ツールである。詳細は本書をご覧ください。が、「偽陽性」を少なくする工夫がなされている点は見逃せない。たとえば子どもに疾患や障害のあることはリスク要因であるが、経済的な余裕がありサポートしてくれる人のいる家庭と、経済的に困窮していて孤立している家庭では、リスクが違ふことは経験的にはわかってはいたが、PACAP ではこれを点数化した。すなわちリスク得点と適応得点を個々に算出し、リスク得点が高くても適応得点が高い家庭を偽陽性と判定し、本当にリスクの高い家庭のみをスクリーニングできるのである。本誌の読者であれば、この工夫がいかに関重要なポイントであるかわかっていただけたらと思う。現場にとっては福音といっても過言でないだろう。

すでにこの問題に取り組んでいる市町村保健師をはじめ、要保護児童対策地域協議会のメンバーや組織の長の方にぜひ読んでいただきたい。PACAP のみならず、日ごろの業務を建設的に見直すヒントが得られること請け合いである。